

れを謂ふなり。

僧を罵ると邪姪とをもちて患しき病を得て死ぬる縁

第十一

聖武天皇の御世に、紀伊国伊刀郡桑原の狹屋寺の尼等願を発し、彼の寺に法事を備へ、奈良の右京の薬師寺の僧題惠禪師を請へ字は依綱禪師と曰ふ。俗姓依綱連なり。故に以ちて字とす、十一面観音に奉仕りて悔過す。時に彼の里に一の凶しき人有り。姓は又忌寸なり字は上田三郎と云ふ。天骨邪見にして三宝を信はず。凶しき人の妻上毛野公大椅の女有り。一日一夜に八の斎戒を受け、悔過に参行きて衆の中に居る。夫外より家に帰りて妻無きを見、家の人に問ふ。答へて曰はく「悔過に参往けり」といふ。聞きて瞋怒り、すなはち往きて妻を喚ぶ。導師見て、義を宣て教化ふれども信受けずして曰はく「無用語して、汝吾が妻に婚ふ。頭割ち破らるべし。斯下しき法師なり」といふ。悪口し多く言ふこと具に述ぶること得ず。妻を喚びて家に帰り、すなはち其の妻を犯せば密爾に闇に蟻着きて嚼み、痛み死ぬ。刑を加へざれども、患しき心を発して濫しく

罵りて恥ぢしめ邪姪を恐りざれば、故に現報を得るなり。口に舌の舌生ひ万言を白すといへども、憤憤を誹ることなかれ。條に災を蒙るが故なり。

蟬と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報に蟬に助けらるる縁

第十二

山背国紀伊郡の部内に、一の女人有り。姓名詳ならず。天年慈ぶる心ありて種く因果を信ひ、五戒と十善とを受持ちて生物を殺さず。聖武天皇の代に、彼の里の牧牛の村童山川の蟬を八取りて焼き食はむとす。是の女見て、牧牛に勧へて曰はく「幸願はくは、此の蟬を我れに免せ」といふ。童男辞否びて聴さずして曰はく「なほ焼き食はむ」といふ。慇に誂へ乞ひて衣を脱ぎて買ふ。童男等すなはち免す。義禪師を御請へて呪願せしめて放生つ。然りして後に山に入り、太蛇の大蝦を飲むを見る。太蛇に誂へて言はく「是の蝦を我れに免せ。多くの帛を略奉らむ」といふ。蛇聴さずして呑む。女帛帛を募りて禱りて曰はく「汝を神として祀らむ。幸乞はくは我れに免せ」といふ。聴さずしてなほ飲む。また蛇に語りて言はく「此の蝦に替りて吾れ汝が妻と為らむ。

は、本説話とは前提が異なり、かえつて本説話からは遠い。一、未詳。二、大般涅槃經、梵行品。梵網經古迹記、下本。

第十一縁 今昔物語集、十六ノ三十八に書承。

一、事が八斎戒を受持している期間中に、交わつたことをいう。阿毘達磨俱舍論、分別業品、大智度論、十二などの理解と一致。二、和歌山県伊都郡(伊都)かつらぎ町佐野(佐野)に所在。佐野庵寺跡がその地とされる。三、未詳。本説話以外に所伝をみない。四、本説話に描かれた時よりも少しのちの天平勝宝四年(753)、実忠によつて東大寺二月堂に十一面観音母過がはじめられて(東大寺要録、四)。現代に二月堂の修二会(修二)として遺存。五、名未詳。字の上田は地名、橋本市あたり。本説話以外に所伝をみない。六、文忌寸(漢)住吉大社神代記の子孫の一族。七、未詳。本説話以外に所伝をみない。八、若くは能於半月半月、或第十四日、或第十五日、受持斎戒、如法清淨、繫心於我、誦此神呪、便於生死、超四万劫、二十一面神呪心經。斎戒を受持して呪を誦すならば四万劫の生死を超え、と述べられる。一日一夜と明記するのは十一面観自在菩薩心密言金剛薩埵經、上。この縁は空海によつて將來されたもの。聖武天皇の御世には、まだ將來されてはいない。九、八斎戒は在俗の仏教信者の一日一夜に守る戒。内容に関しては諸説があるが、阿毘達磨俱舍論、分別業品に「八所止、離としてあけられてゐるのは、殺生、不与取、非梵行、虚誑語、飲諸酒、塗香、鬘、華、歌舞、觀聽、眠坐、高広、麗床、坐、食、非時食、である。一、儀式の主たる役職にちなう僧。二、これは題惠禪師。三、斯下二合、賤(二国会図書館本調影)。大般涅槃經、迦葉菩薩品にみえる「斯下之人」は、大正新脩大藏經の校異によれば、宋本、旧宋本では「斯下之人」。撰集百緣經、五にも「斯下之人」。二「闇」は「闇」の俗字。女性生殖器を「闇」とするのに対して男性生殖器をいう(箋注倭名類聚抄、南方熊楠など)。二、十一面観世音神呪經の呪では、十一面観音への呼びかけは「南無阿利耶路諸吉良婆羅刹菩薩最勝阿彌陀佛」(阿彌陀佛)とされ、後代の梵經抄、四十四でも十一面観音の梵名は「南無阿利耶路最勝阿彌陀佛」(南無阿利耶路最勝阿彌陀佛)とされ、聖者の意の「阿利耶」(阿利也)が冠せられた語形が用いられる。アリア、と唱えただで蟬が救いに現われた、という説話か。

第十二縁 本朝法華驗記、下、二三、今昔物語集、十六ノ十六、などにみえる觀音多寺(紙幡寺、觀音寺)草創説話は、類話ではあるが直接の關係は無い。

三、京都市。三行基の登場する説話で、女人が重要な役職をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、二十九縁、三十縁。二、中巻八縁。三、將來に善果をもたらす十種の善業。十恵に対していう。項目には諸説があるが、法界次第初門、上ノ上によれば、不殺生、不偷盜、不邪淫(以上三種は身業)、不妄語、不阿舌、不惡口、不綺語(以上四種は口業)、不貪欲、不瞋恚、不邪見(以上三種は意業)。法界次第初門、上ノ上は、それぞれを「上」と「三」とに分ける。たとえば、不殺生の止善は殺生の惡をやめること、行善は放生の善をおこなふこと。五戒と十善とは項目の上では重複がある。二、不殺生の止善。三、未詳。上巻八縁にも同じ語がみえる。六、不殺生之行善。一、羽二重(箋注倭名類聚抄)。帛説文云、帛、薄角反、

故に乞はくは我れに免せ」といふ。蛇すなはち聴し、高く頭頸を擡げて女の面を瞻り、蝦を吐きて放つ。女蛇に期りて言はく「今日より七日を経て来れ」といふ。然うして父母に白して、具に蛇の状を陳ぶ。父母愁へて言はく「汝ただ一子なることを了ふべし。何の証き託くが故に能はぬ語を作す」といふ。時に行基大徳紀伊郡の深長寺に有す。往きて事の状を白す。大徳聞きて曰はく「嗚呼、量り難き語なり。ただし能く三宝を信はむのみ」とのたまふ。教を奉りて家に帰る。期れる日の夜に當りて、屋を閉ち身を堅め、種々願を発して三宝を信ふ。蛇屋を繞みて蜿蜒ひ腹行き、尾を以ちて壁を打ち、屋の頂に登りて草を咋ひて抜き開き、女の前に落つ。然りといへども蛇女の身に就かず。ただし爆竹音のみ有り。跳ち鱗鬣るるが如し。明日に見れば、大蟬八集り、彼の蛇を条然に捕段切る。すなはち知る、贖ひ放てる蟬の恩を報ゆることを。恬無き虫すら、なほし恩を受けて返りて恩を報ゆ。あに人にして恩を忘れむや。此れより已後、山背国に山川の大蟬を貴びて、善せむとして生を放つなり。

俗云、波久乃岐岐、薄情也(和名抄)。三広領・人・二十・陌(真白切)に「帛幣帛」とあるのに拠つて帛と帛訓に訓む。上巻一縁のごとく「みてぐら」と訓んでもいいが、上文にみえる「帛奉多帛」の「帛」が神へのささげものを必ずしも意味しないことに配慮し、連続性を重視して訓む。三財を代償にして何かを求める。名義抄では「帛」「贖」などに「ツノル」の訓。三上文では帛を手とるという条件をことばで提示。ここでは実際に帛を手とてさらに神として祀るという新たな条件が示される。三以下は行文、中巻八縁に類似。上巻八縁、帛を手とる、神として祀る、妻となる、と次第に好条件が提示されてゆく。妻が神よりも上位に位置づけられていることが注目される。

一何がおまえに憑いてたましているからなのか、でもしないことを言うのは。
二深草寺。「深草 不賢平佐(高山寺本和名抄)」。行基の四十九院のひとつとして天平三年(三)に建立された法華院か。所在未詳。
三蛇との約束を守つて蛇の妻となるならば不邪淫戒(五戒のひとつ)を犯すことになり(上巻八縁)、約束を破るならば不妄語戒(五戒のひとつ)を犯すことになる。どちらの道を進んでも解決はない。改めて放生と報恩の物語が語りおこされなければならない。
四「虫」の語にはは蝶、飛蝶、さまざまな用法があるが、ここでは人以外の動物の総称。
五このような風習の存在は未詳。九世紀後半に石清水八幡で放生会がおこなわれ、以後盛行するに至ったこととかかわりがあるか。

第十三縁 あやしき表(二)の説話。今昔物語

愛欲を生じ吉祥天女の像に恋ひて感心して奇しき表を示す縁 第十三

和泉国泉郡の血淨上山寺に、吉祥天女の攝像有す。聖武天皇の御世に、信濃国の優婆塞来りて其の山寺に住む。天女の像に睥ちて愛欲を生じ、心を繋けて恋ひ、六時ごとに願ふ。「願はくは天女の如き容好き女を我れに賜へ」とねがふ。優婆塞夢に見て、天女の像に婚ふ。明日に瞻れば、彼の像の裾の腰に不淨染み汚れたり。行者視て慚愧ぢて言さく「我れ似たる女を願ふ。何すれぞ忝く天女専自づから交りたまふ」とまうす。婉ぢて他人に語らされども弟子偷に聞く。後に其の弟子師にれ無し。故に憤め擯ひ去らる。里を擯出され師を訛り事を程す。里人聞き、往きて虚実を問ひ、並に彼の像を瞻れば淫精染み穢れたり。優婆塞事を隠すこと得ずして、具に陳べ語る。諒に委る、深く信はば感きて応へずといふこと無し、と。是れ奇異しき事なり。涅槃経に云ふが如し「多姪の人は画ける女にすら欲を生ず」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

集・十七ノ四十五に書承。
六男女親子間の心憎を執着としてとらえ、それを悪と考える立場からいう語。仏典語。
七男の愛欲の対象となる例に、古本説話集・下・六十二がある。源氏物語・帚木に「吉祥天女を思ひかけむとすれば」とみえる。
八上巻二縁。血淨上山寺は大阪府和泉市横尾山町の施福寺の地に所在したが、この寺には聖観音の木像も安置されていた。上巻三十七縁。八聖像。彩色がほどこされていたであろう。
九「壺」は盃(水、酒、米、などをいれる瓦器)の類をあらわす文字。大安寺伽藍縁起并流記資財帳にみえる「撰四天王像」の「撰」を攷証は「壺」のあやまりとするが、聖像をあらわす文字が「壺」なのか「撰」なのかは再考の余地がある。法隆寺五重塔初層内蔵の聖像群を、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳は「壺塔本陣面具撰」としている。
一〇最勝具。
一一日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中。
一二「三」今「使人於睡夢中、得見於我」随所求事、以事告知。金光明最勝王經大吉祥天女增長財物品。金光明經と本説話との関係は和辻哲郎の指摘がある。
一三精液。精液を「淫」というのは仏典語。たとえは四分律・十三僧戒法にみえる。
一四「行者」と称されるのは本書では優婆塞。上巻二十八縁、中巻二十一縁、下巻十四縁、二十八縁。二五どういう理由で。
一六淫事。下文の「事」と同じ。
一七国分寺書院本訓読(程アラハス)。
一八精液。
一九「畫如有人見二画女像、亦復生、以生食故、得種罪」(大般涅槃經・光明遍照高貴德王菩薩品)。

凶人、姓文忌寸也。云云。上田三郎矣。天骨邪見、不信三宝、凶人之妻、有上毛野公大橋之女、一日一夜、受八齋戒、參行梅過、居於衆中、夫從外歸家、而見無妻、問家人、答曰、參往梅過、聞之瞋怒、即往喚妻、導師見之、宣義教化、不信受曰、為無用語、汝婚吾妻、頭可所割破、斯下法師矣、惡口多言、具不得述、喚妻歸家、即犯其妻、率爾閉著、蟻嚼痛死、雖不加刑、而發惡心、濫罵令恥、不恐邪姪、故得現報也、口生百舌、雖万言白、慎莫誹僧、倏蒙災故也。

3 文(來) 一 文
4 忌(來) 一 忌
5 橋(來) 一 橋

6 妻(來) 一 ナシ
7 解(國) 一 解
8 倏(國) 一 倏
9 災(來) 一 災

讀解蝦命放生現報所助緣第十二

山背國紀伊郡部內、有一女人、姓名未詳也、天年慈心、隨信因果、受持五戒十善、不殺生物、聖武天皇代、彼里牧牛村童、山川解取八、而將燒食、是女見之、勸牧牛曰、幸願此解免我、童男辭不聽、曰猶燒噉、慙謝乞、脫衣而買、童男等乃免之、勸請義禪師、令祝願以放生、然後入山、見之大蛇、飲於大蝦、詭大蛇言、是蝦免我、略奉多帛、蛇不聽吞、女寡幣帛、而禱之曰、汝為神祀、幸乞免我、不聽猶飲、又語蛇言、替此蝦以吾為汝妻、故乞免我、蛇乃聽之、高捧頭頸、以瞻女面、吐蝦而放、女期蛇言、自今日經七日而來、然白父母、具陳蛇狀、父母愁言、汝了唯一子、何誑託故、作不能語、時行基大德、有紀伊郡深長寺、往白事狀、大德聞曰、烏呼難量之語、唯能信三宝耳、奉教歸家、当期日之夜、閉屋堅身、種々發願、以信三宝、蛇繞屋、蛇

1 讀 一 讀
2 曰(來) 一 白
3 否(來) 一 ナシ
4 詭(來) 一 詭
5 蝦(來) 一 蝦
6 幣(來) 一 幣
7 幣 一 幣
8 禱 一 禱
9 汝 一 ナシ
10 聞(來) 一 聞

軀腹行、以尾打壁、登於屋頂、昨草拔開、落於女前、雖然蛇不就女身、唯有爆音、如跳鱗、明日見之、大解八集、彼蛇条然、揃段切之、乃知、讀放解報恩矣、無悟之虫、猶受恩返報恩、豈人心忘恩歟、自此已後、山背國、貴乎山川大解、為善放生也。

11 登(來) 一 登
12 背(來) 一 背

生愛欲戀吉祥天女像感示奇表緣第十三

和泉國泉郡、血浮上山寺、有吉祥天女攝像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞、來住於其山寺、曉之天女像、而生愛欲、繫心戀之、每六時願、々如天女容好女賜我、優婆塞夢見、婚天女像、明日瞻之、彼像裙腰、不淨染汚、行者視之、而慚愧言、我願似女、何忝天女事自交之、愧不語他人、弟子儉聞之、後其弟子、於師無礼、故遭擯去、所擯出里、訕師程事、里人聞之、往問虛美、並瞻彼像、淫精染穢、優婆塞不得隱事、而具陳語、諒委深信之者、無感不心也、是奇異之事矣、如涅槃經云、多姪之人、画女生欲者、其斯謂之矣。

1 上(國) 一 ナシ
2 境(國) 一 境
3 語(國) 一 語
4 之(來) 一 ナシ

窮女王婦敬吉祥天女像得現報緣第十四

聖武天皇御世、王宗廿三人、結同心、次第為食、設備宴樂、有一窮女王、入宴衆列、廿二王、以次第設宴樂已訖、但此女王、獨未設食、備食無便、大恥貧報、至

1 王(國) 一 ナシ